

ジョン・スタインベックの*The Grapes of Wrath*の翻訳者としての新居格

山内 圭¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部地域福祉学科

(2022年9月21日受付、11月16日受理)

本稿は、アメリカ合衆国のノーベル賞作家ジョン・スタインベックの*The Grapes of Wrath*(1939)を『怒りの葡萄』として日本で初めて翻訳をした新居格の翻訳者としての側面について述べたものである。考察に当たっては、新居格の孫である元田進氏が保管している一次資料を参照して行った。
(キーワード) 新居格、『怒りの葡萄』、ジョン・スタインベック

1. はじめに

アメリカ合衆国のノーベル賞作家ジョン・スタインベック(John Steinbeck, 1902-1968)は、1939年に*The Grapes of Wrath*を出版し、それはまたたくまにベストセラーとなった。その著作の第17章までの前半を同1939年に「上巻」として、そして第18章から第30章までの後半を「下巻」として翌1940年に『怒りの葡萄』として翻訳出版したのが、新居格(1888-1951)である。新居格は、翻訳家以外にも、新聞記者、社会批評家、小説家、政治家などいろいろな顔を持つ人物であるが、本研究では、彼の書き残した文章や日記等も参照し、『怒りの葡萄』初訳者としての姿に焦点を当ててみたい。

2. 新居格の生い立ちと仕事について

新居格は、1888(明治21)年3月9日に徳島県鳴門市大津町大幸に医師の父譲と母キヨの次男として生を受けた。長男は夭折し、姉で長女のフミ、弟厚、妹で次女のムメ、三女ヒデ、四女テル、いとこに賀川豊彦がいた。格は他のきょうだいとは別に4km離れた村で祖父母に育てられた。1901(明治34)年、13歳の時、旧制徳島中学(現・徳島県立城南高等学校)に入学した。ちなみにその翌年1902年の2月27日、アメリカ合衆国カリフォルニア州サリーナス(Salinas)でスタインベック家の長男としてジョン・スタインベックが誕生した。ジョンは姉二人、妹一人の長男であった。さて、格は、1904(明治37)年旧制徳島中学校4年生の時、「わが千行の血の涙」と題した演説で校内の弁論大会に出場し、校長をはじめとする教員の悪口を弁じたため停学となり結局卒業が一年遅れた¹⁾。また、格は同年16歳で江富トクと結婚した。そして、翌1905(明治38)年には長女美代子が誕生した。格がまだ17歳の時である。美代

子は2年後に亡くなり、1907(明治40)年、旧制徳島中学を卒業し、鹿児島旧制第七高等学校造士館に入学した年に、次の娘好子が誕生し、これを「長女」とした。1910(明治43)年第七高等学校を卒業する22歳の年に長男俊一が生まれた。そして同年9月に東京帝国大学(現・東京大学)法科大学政治学科に入学した。また翌1911(明治44)年2月19日に父の譲が逝去した。1914(大正3)年に次女多美子が生まれた。1915(大正4)年7月に大学を卒業し、同9月に大学院に籍を置き、4年間在籍した。1916(大正5)年には三女美智子が誕生している。

この1916年に小野塚喜平次政治学科教授の紹介で読売新聞社に勤め始めるが、1918(大正7)年、30歳の時に主筆の交代人事をめぐる確執のため退職している。翌1919(大正8)年、吉野作造の紹介により大阪毎日新聞社の記者となり、論説を担当した。その頃、先輩の記者に薄井泣菫が在籍していた。8月ごろ、丹毒で大阪回生病院に入院し、生死の境をさまよった。同年末には大阪毎日新聞社を退社した。また、この年宮嶋資夫らと文芸同人誌『これから』を発刊した。1920(大正9)年、東京に戻って東洋経済新報社に約1か月半籍を置き、その後、東京朝日新聞に山形・群馬版記者として勤務した。

同年、『新潮』7月号に寄稿、翌1921(大正10)年には『左傾思潮』(文泉堂書店)を刊行、その翌年1922(大正11)年に『週刊朝日』に「鼠小僧次郎吉」を連載し、文筆の道を進み始める。1923(大正13)年末に朝日新聞社を退社した。また同年『明星』2月号にレオ・マチアスの「労農露国演劇観」を寄稿し、同誌にはその後数年にわたり評論、戯曲、翻訳、小説、小品を発表している。

1924(大正13)年に高円寺に転居し、イタリアの作家、評論家、詩人のジョヴァンニ・パピーニ(Giovanni Papini, 1881-1956)の『パピーニ自叙伝=終りし人=』をアテネ書院から翻訳出版している。この辺りから翻訳家としての活

*連絡先: 山内 圭 新見公立大学健康科学部地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

躍が始まる。

翌1925（大正14）年には文化学院の社会思想史の講師となる。この年『明星』5月号から小説「ニゲラ」の連載を開始した。そして昭和時代となり1926（昭和元）年、短編小説集『月夜の喫煙』を解放社から出版した。昭和の時代が始まる頃から、小説家としての格の活躍が始まる。その後、短歌や詩も発表しており、創作者として活動の幅を広げた。

1928年にはロシアの革命家クロポトキン（Pjotr Aljeksjejevich Kropotkin, 1842-1921）の『クロポトキン全集9』のロシア文学の評論の翻訳を担当している。翌1929（昭和4）年には新潮社の『世界文学全集』に収められたジャック・ロンドン（Jack London, 1876-1916）の「奇体の破片」などを翻訳している。翻訳者としてはこの後、主なものとしてアンドレ・マルロー（Andre Malraux, 1901-1976）著『熱風』（1930年）、マクシム・ゴーリキー（Maksim Gor'kii, 1868-1936）著『四〇年』（1930年）、『尖端短編集』（1930年）所収のウォーター・ホワイトの短編小説「燧石の中の石」、ヴィッキー・バウム（Vicki Baum, 1888-1960）著『グランドホテル』（*Grand Hotel*, 1932）（1932年）、パール・バック（Pearl Sydenstricker Buck, 1892-1973）著『大地』（*The Good Earth*, 1931）（1935年）、林語堂（1895-1976）著『我園土・我園民』（1937年）、ジョン・スタインベック著『怒りの葡萄』（1939/1940年）、マジョリ・ローリングス（Marjorie Kinnan Rawlings, 1896-1953）著『イヤリング』（*The Yearling*, 1938）（1939年）、パール・バック著『ありのままの貴女』（1940年）、クリストファー・モーリー（Christopher Darlington Morley, 1890-1957）著『青春の記録』（*Kitty Foyle*）（1940年）、カール・フリードリッヒ著『未来の旗』（*The New Belief in the Common Man*）（1948年）、パール・バック著『龍子』（*Dragon Seed*, 1942）（1950年）などがある。

上記のように文人及び社会批評家として活躍してきた格は、1947（昭和22）年杉並区長に立候補し、初の公選区長として当選を果たす。体調不良のため翌年1月に職を辞するまで1年間区長を務めた。公職を退いた後も各地に講演旅行などを行い、1951（昭和26）年には愛知大学で「現代文学論」の講義の担当を依頼されたが、講義をすることなく、同年11月15日に脳溢血のため死去した。

3. 翻訳家としての新居格

先述のように様々な活躍をした新居格であるが、ここでは彼の翻訳家としての活躍に焦点を絞ってみたい。格は東京帝国大学（現・東京大学）法科大学政治学科に入学しているため、英語及び他の外国語を専門的に学んだわけではないが、格は、英語の勉強も独学でかなりこなしていた（久保田・山内 2）。

格は、彼の初の翻訳作品の単行本となったイタリアの作家、評論家、詩人のジョヴァンニ・パピーニの『パピーニ自叙伝＝終りし人＝』のあとがきとして以下のように記している。

跋

本書は、近來「基督傳」その他で文名頓に揚つたイタリアの文人ジョヴァンニ・パピーニの自叙傳小説Un Uomo Finitoを譯したものである。小説とはいひ條、殆ど自傳と見なしていいであらう。従つてパピーニを知らんと欲する者にとつては興味倦かるべしと信ずる。

本書はイギリス版及びアメリカ版の英譯に從つた。淺學非才の上、匆々の際に譯したので、定めし誤譯も多い事と思ふ。生憎製版までに原本が手に入らなかつたので十分に訂正する事が出来なかつた。幸にして再版が出る機会を得れば、完璧を期したいと思つてゐる。大方の御宥恕が願へれば幸甚である。

大正甲子孟夏

譯者識

これにより、格はイタリア語の原作を日本語に翻訳したのではなく、英語翻訳版を使用して日本語への翻訳をおこなったことがわかる。前述した格が翻訳した作品の原作は、他にはロシア語、ドイツ語、中国語のものもある。これらについても英語翻訳版の使用が十分考えられる。

当時の翻訳事情は今とは違い所謂「早い者勝ち」的な要素があったようである。したがって、同じ作品の翻訳が複数の出版社から相次いで出版されるということもあった。

4. 『怒りの葡萄』の翻訳者としての新居格

1951年に亡くなった格の没後70年となる2021年、格の故郷徳島において「新居 格の仕事」展が徳島県立文学書道館において8月12日から9月20日にかけて開催された。新居志郎氏により同展を紹介され、筆者は9月19日に観覧の機会を得た。様々な展示がされる会場のガラスケース内に格の日記が一部はページが開かれた状態で、その他の日記帳はほとんどが閉じられた状態で展示されていた。スタインベック研究者として筆者は、かねてよりスタインベックの『怒りの葡萄』を日本で初めて翻訳紹介した新居 格には敬意を抱いていた。そして、それと同時に、英和辞典も現在ほど充実しておらず、第2次世界大戦が始まろうとしている1939年ということを考えても周りにすぐに尋ねることができるアメリカ人がいたとは考えにくいし、現代のようにインターネットで何でも調べられるわけではなかった当時に、話し言葉や俗語表現などが頻出する『怒りの葡萄』という作品を翻訳する際に、かなりの苦勞があったのではないかと考えていた。したがって、この展示で格の日

記の存在を知った時、『怒りの葡萄』を翻訳していた頃の日記を読ませてもらえれば、例えば翻訳に苦労したことや翻訳の難しさについての愚痴などが書かれていないかと考えた。

特別展を観覧後、新居志郎氏に上記のようなことを申し上げたところ、日記を含め関連資料を保管されている東京都在住で格の孫の元田進氏をご紹介いただいた。

元田氏も筆者のお願いに対し、快く訪問を許してくださいました。2021年11月20日と21日の2日間、元田進氏邸に保管されている新居 格の資料を閲覧させていただいた。なお今回引用をした資料の使用については元田氏より許諾を得ていることをここに記しておく。まず、閲覧させていただいたのが『怒りの葡萄』の翻訳作業を行っていた1939年の日記である。格の日記帳であるが、既にページごとに日付が印刷されており、その日の出来事をそのページに記していくタイプのものを使っていた。日記の記載状況は、毎日几帳面に記すというわけではなく、記述が多い日も見られるが、メモ程度であったり、白紙のページが続いたりという状況であった。また正月や月初めは気分新たに分量を多く記しているが、しばらくすると記述量が減るという極めて人間的な傾向が、日記帳が残されている期間(1917年～1950年)じゅう、見られた。これは、格の性格のためであったであろうし、また、とにかく多方面にわたる文筆をおこなっていたことから日記を書く時間も惜しかったということもあったのかもしれない。

ちなみに、『怒りの葡萄』の原作者ジョン・スタインベックは同作品の執筆期間中、その創作についての日記をほぼ毎日残し、それは後年*Working Days: The Journal of The Grapes of Wrath* (1989)として出版されている。また、別の大作『エデンの東』(*East of Eden*, 1952)の執筆時にもスタインベックは編集者Pascal Coviciへの手紙という形態を取りつつ日記のように創作についての考えなどを記していた。これも後年*Journal of a Novel: The East of Eden Letters* (1969)として出版されている。スタインベックは、作品の執筆のウォーミングアップとして日記や手紙を書いていたようであるが、これらが残されていることにより、研究者及び読者はスタインベックがどのようなことを考えながら作品を執筆していたのかがわかり、極めて興味深い。

もし格がスタインベックのように翻訳時の考えや苦労などを日記に残しておいてくれたのであれば、現在、極めて貴重なものとなったが、残念ながらそれは後世の研究者の勝手なないものねだりである。実際、格の日記中、筆者がスタインベックの『怒りの葡萄』に関する記述を確認できたのは以下の4つの記述である。

昭和15 (1940) 年1月31日

朝はや、遅し。柴山以外人來らず。午後三時まで

スタインベックの「怒りの葡萄」式五章迄²⁾。そして入浴、(後略)

昭和15 (1940) 年2月23日

電話で角川大田朝男さんに「ありのまゝの貴女」が着いたしらせ。「怒りのブドウ」の話出る。(後略)

昭和15 (1940) 年2月24日

(前略)「かねなか」より三笠に電話。「大地」の一冊に入れるのはスタインベックのもの。しかし「怒りの葡萄」に非ず。(後略)

昭和15 (1940) 年4月29日

午前中、スタインベックの翻訳の直しをしてあと、遠藤君が来る。正午過ぎ(といっても一時近く)不二家へ。

格の日記中、『怒りの葡萄』およびスタインベックの記載は以上であった。ここから確認できることは、格が自宅において『怒りの葡萄』の翻訳及びその手直しの作業をしたこと、また、出版関係者からもよく話題に上がっているほど好評を得ていたであろうことである。

元田邸には、格の日記以外にも貴重な資料が数多く残されている。その中には『怒りの葡萄』翻訳版の紹介記事なども見られた。また、格の出版・翻訳した書籍はもとより、新聞や雑誌等に寄稿したおびただしい分量の記事の切り抜きなども保管されている。記事の切り抜きのなかには、発表した雑誌や新聞の名前や発行年月(日)等が記録されていないものもあり、関係各所への確認等、綿密な調査が望まれる状態であった。格の蔵書も、おそらくは本当に手近にあったもの(のみであろうか)については幾分かは残されているが、これだけの文筆活動を行った新居格にしては全く少ない冊数であった。実は『怒りの葡萄』を翻訳している頃の日記以外に探していたものは、格がスタインベックの『怒りの葡萄』を翻訳した時に利用した原書であった。原書に書き込みなどがあつたとすれば、格の翻訳を探る上での参考になるだろうと考えた。ところが原書は残念ながら残されていないとのことであった。

ただし、格は『怒りの葡萄』上巻の「序文」においてこの作品の翻訳において苦労したこととして以下のように述べている。

さて、わたしはこの書の翻譯に當つて厄介に思つたことは、田舎言葉であつた。西南部並に中部アメリカの西方部の移住農民達の言葉は讀むのに樂なものではなかつた。鄙語、俗語、地方語といつたものが實に多いからだ。それなのに、いやそれ故に、如實の度を強めてアツピールするところが深いのであつた。たゞ、それを譯出

するのに、どの程度の、或はどの地方の田舎言葉にしたらばいいかといふことだつた。それと、わたしの譯語が多少とも都會労働者の調子の消し兼ねたところがあつたのではないかと思ふ。がその點はわたしの力の不足である。(上巻5)

やはり、西南部や中部アメリカの西方部の移住農民たちの言葉を読むのは楽ではなかったと書かれている。辞書やインターネットも発展し、さらにアメリカ人などにも容易に確認できる現在に生きる我々が、それらの条件が整っていなかった過去の翻訳を見て間違いを指摘するなどということは、先人の偉業に対してケチをつけることになるかもしれないが、それでも外国文学解釈の歴史を知る上では意味があることだと思われるので、別の機会に検討をしてみたい。

ここでは、それとは別に、田舎言葉ではない一般的な言葉を田舎者の発言のように読者に印象づけるために格がした工夫の一つ取り上げておきたい。これは、筆者が別のところでも取り上げた点であるが(山内5-6)、「新居 格の仕事」展で『怒りの葡萄』の翻訳例として会場にパネル展示されていた部分を以下、紹介する。

「可笑しな事じゃねえか。誰かゞ少しの地所を持つているとする。その地所はその男のものだ。彼の一部で彼の身体のようなものだ。土地さえあれば、その上を歩く事が出来るし、それをいじっている事も出来る。又、豊作でねえ時にゃ、悲しくなるが、お湿りがあると嬉しくなる、その土地は彼のもんなんだ。考えようによっちゃ、地所を持つているから、得意にもなれるだろうよ。よしんば作物が出来なくても、その土地のお陰で気が大きくなるものだ。そういう訳だよ」小作人はさらに思い廻らせた。「だがよ、地所を持つていても、その土地を見もしなければ、土をいじる暇もなく、その地所を歩くことも出来ねえものがあるとする一どうだ、その時にゃ、地所がその男になるんだ。したい事も出来ないし、望むことも考えられないのだ。土地が人の役をして、人間よりも強いんだ。そうして人間は、得意になるどころか、小さくなってらあ。たゞ所有地ばかりが大きいだけで、一彼奴はその地所の奴隷なんだ、それもそうじゃねえか」(上巻81)

この部分は、*The Grapes of Wrath*の初版であるViking版ではpp.50-51の部分である。この引用の5行目に「お湿り」という訳語が見られる。格の訳を読むと、英語のどのような語を「お湿り」と訳したのだろうかと思ふところだが、原典に当たってみると原文では“the rain”(50)と通常語が使われている。これは、格がこのセリフの小作人らしさを出すためにしている訳出上の工夫であると考えられる。

では、格はどうして『怒りの葡萄』を翻訳しようと考え

たのであろうか。これについても「序文」に以下のように述べられている。

わたしはこの小説が驚異的なベスト・セラアであるが故に反(ママ)譯したのではない。何よりもわたし自身が近來にない感動をもつてよむことが出来たからである。原著者の作品をさうよんではみないから、彼のこれまでの全作品についてかれこれといふことは出来ないが、この「怒りの葡萄」が非常な傑作であり、この一書だけでスタインバックはその名を決定的に不朽にしたことは事實である。かくの如く迫力のある作品をアメリカが生もうとはとさへわたしは思はなかつたのである。その深い感動が元々翻譯家でない、そして翻譯の筆を折らうとさへ考へてゐたわたしをじつとしては居らせなかつたのであつた。(上巻1)

古今東西様々な書籍を読んでいた格³⁾が「わたし自身が近來にない感動をもつてよむことが出来た」ことを本書を訳出した理由の第一に挙げている。中山喜代市も『ジョン・スタインバック』においてこの部分を紹介し、さらに「怒りの葡萄」こそ最も移植していい、アメリカ文學といふことが出来るのである」(上巻8)という序文の最後の部分を紹介している(164-165)。格がこの作品を高く評価していることは、序文の他の部分にも見られる。

ジョン・スタインバックが、その傑作「怒りの葡萄」に取材したものは、その「オーキース」の問題なのである。「オーキース」のもつ悪臭と悲惨、勇氣と混亂とを描寫して強烈なる感銘を讀者に與へてゐる。この小説が二十世紀の「アンクル・トムス・キャビン」の稱があり、今日の米文壇で稀に見るベスト・セラア中のベスト・セラアになった所以である。

わたしはかくの如き力強い農民小説を米國がわれわれに提供して呉れようとは少くともわたしには意外でさへあつた。讀むものは何よりもこの小説の迫力を感じざるを得ないであらうと思ふ。(上巻2-3)

Uncle Tom's Cabin (1851) はハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Elizabeth Beecher Stowe, 1811-1896)による黒人奴隷の生活について書かれた作品であり、奴隷制度の賛否についての議論を盛んにした。エイブラハム・リンカーン大統領(Abraham Lincoln, 1809-1865)が彼女に会ったときに、「あなたのような小さな婦人が、この大きな戦争(南北戦争)を引き起こしたのですね」と言ったとされる小説である。この小説が日本に初めて紹介されたのは1897年であり、その後、1939年までにはいくつかの翻訳が出版されている。

また、格は今後のスタインバックへの期待を次のような

言葉で述べている。

スタインベック (ママ) は一九〇〇年生れ (ママ) であるから、まだ四十歳の若さである。で、もしも彼が今後に於て、「怒りの葡萄」の如き快作を書きつゞけるならば、彼とそ (ママ) アメリカが生んだ曾つてない大作家の地位を確立するのではないかと思はれる。(上巻 3-4)

ここでは、正しくは1902年生まれの新居格が1900年生まれと紹介されていたり、スタインベックの名前にも誤植が見られるが、格のスタインベックが大作家になるという予言は、彼が1962年にノーベル文学賞を受賞したという事実から判断しても的中したと言えよう。

そして、格はこの序文の中に、日米関係やアメリカ理解についての提言も入れている。

「怒りの葡萄」をよむとき、われわれはアメリカの一つの眞實に觸れたやうな気がするのである。といふのは、われわれがアメリカと云へば直ちに射影する、ワシントンを通じてのアメリカ、紐育、シカゴ乃至ハリウッドを通してのそれであり過ぎたからだ。この小説を通じて觸れるアメリカに、大凡それらとは異なるからである。しかもそれにアメリカの一つの形貌と眞實とがあるのである。

文學を離れて少しく附言するが、今日の日米関係を相互によくするためには相互に一層よく理會し合ふことである。われわれは駐日米國大使の演説に徴してもまだ一段と理解の滲透が望ましいものがある。だが、それではわれわれの方は知悉し得てあるアメリカだからだろうか。そこに來ると百パーセントの自信がもてるであらうか。われわれは知つた上に知らねばならぬ。少くとも、本書の如きはそのためにはよまれていゝものだとわたしには信ぜられるのである。(上巻 7)

まず、ここには格のアメリカ理解についての考えが述べられる。つまり、アメリカを理解するためには、首都を通じて発信されること、ワシントンやニューヨークやシカゴなどの大都市を見ること、また映画に描かれるアメリカを見るだけでは不十分だということである。また、そのような日本側のアメリカ理解、そしてアメリカ側の日本理解という相互理解が日米関係を相互によくするために必要であるとも述べている。ここで急いで付け加えておかななくてはならないのは、格がこの序文を書いたのが間もなく日米開戦があり日本が第2次世界大戦に突入する1939年であるということである。新居志郎氏は「ここにも伯父の平和への希求をかいま見ることができる」(新居志郎「伯父」5)と述べている。

この度の元田邸での新居格の資料の閲覧では、雑誌や新聞等に寄稿した文章を見ることができたことが大きな収穫であった。雑誌名は不明であるが、「土の文學」というコラムに格が「スタインベックの「怒りの葡萄」」と題して寄稿したエッセイを閲覧することができた。そこには「21.6」の記入があったので、昭和21 (1946) 年6月 (号) のことだと考えられる。その文章の末尾には以下のようにやはり『怒りの葡萄』を高く評価している記述が見られる。

スタインベックの「怒りの葡萄」は、アメリカが生んだ農民小説として、一つの位置を世界文學の、分けても、世界の農民文學の上に要求しうるものである。

ここに出てくる「農民文學」という言葉は近年ではあまり耳にしないが、当時はよく使われていたようで、日付は不明ではあるが、新居格のスクラップブックに保存されていたおそらく雑誌の切り抜きに雪野信越 (ペンネームであろうか) の「農民文學の夕」という文章があり、その中に「農民文學懇談會が生れて一周年」とある。そして、それを記念して「農民文學の夕」が開かれ、新居格も「農民文學について講演した」が紹介されている。前後に貼られている切り抜きから、この記事は『怒りの葡萄』出版直後の1940年代初めころのものだと推察される。

続いて発行年月日は不明であるが文藝時報社発行の『芸術新聞』に新居格が寄稿した「ジョン・スタインベック作「怒りの葡萄」」という文を紹介したい。この文の冒頭には、「「怒りの葡萄」を書いたジョン・スタインベックといふ男は此の小説を書いただけで將來何も書かなくても残る作家である」と書き出している。ただし、この文中には、以下のように不正確な記述も見られる。

作者のスタインベックも、作品との對照に於て見ると興味がある。大學を出てニューヨークで新聞記者をしたり日雇労働になつたりヨーロッパに渡つて靴直しをやつたり色々な職業を轉々として暮した。

ここに書かれる「ヨーロッパに渡つて靴直しをやつたり」という記述については、現在のところ、そのような事実は確認されていないと思われる。

次に紹介するのは日本學藝新聞社発行の『日本學藝新聞』昭和十四年 (1939年) 十月五日付に掲載された大江專一の「讀書界 アメリカ 最近の傾向」という文である。この冒頭は以下のように書かれている。

最近アメリカで何んな本が讀まれてゐるか云へば、まづ創作ものではジョン・スタインベックの『怒りの葡萄』(*The Grapes of Wrath*) を筆頭に擧げなければならぬ。あちらで出版されてから間もなく私の手元へ送ら

れた本の扉には『出版前三版』と印してあるのを見ても、職業批評家から非常に高く評価された作品であることが判つたが、ついこの間入手したニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙の調査にも、この『怒りの葡萄』がアメリカ全国に亘つて恐ろしい人気を呼んでゐる事實を擧げてあつた。

ここにはアメリカにおいてスタインベックの*The Grapes of Wrath*がかなりの人気を呼び、高く評価されていることが紹介される。そのスタインベックの評価について、この記事では非常に興味深いことが書かれている。

比較的低調のメロドラマチックな『廿日鼠と男共』とは断然違つた味がある。これは寧ろ彼の『怪しい戦』『赤い馬』の範疇に属するが、とにかく現在アメリカ農業社会の矛盾が如何に深刻であるか、この農民社会小説が雄辯に物語つてゐる。

この文では『廿日鼠と男共』と紹介されている*Of Mice and Men* (1937) が「比較的低調」「メロドラマチック」と評されていることが興味深い。この文では、引き続きスタインベック以外によく読まれている書として以下のように紹介される。

スタインベックに次いで故トーマス・ウルフの『蜘蛛と岩』が博し讀まれてゐる。ジヨン・ゼニングスの歴史小説『勇氣に次ぐ』も時節柄評判がよいやうだ。ピュリツァ賞発表と共にローリングス女史の『イヤリング』がまづぼづぼつ（ママ）買れ出してゐる。

ここに紹介されているローリングス女史の『イヤリング』も新居格訳で四元社より出版されており、この記事が掲載されている日本学藝新聞の表題の下に同書の広告が掲載されていることは興味深い。

次に『新聞之新聞』の「新刊案内」を取り上げる。スクラップブックには「一四・一一・一五」と書かれているので、昭和14年（1939年）11月15日号であろうが、その冒頭には「『廿日鼠と人間』で我國に紹介されたスタインベックはこの一作で完全に米讀書界の寵児となつた」と紹介されている。またスクラップブックには昭和14年（1939年）11月20日の日本農業新聞、同年11月27日の「中外商業新報」に掲載された「怒りの葡萄」の新刊紹介も保存されている。

また『中央産業組合新聞』（年月日不明）の紹介にはなんと書名が「怒りの蘭菊」と記載され、翻訳者の名の部分は新居格の「格」のフリガナとして「かく」と記されている。文中では、「有馬會頭が「一讀偉大な感銘を覺えた」と激賞されてゐるが如くすばらしい農民小説である、譯者は

大地の譯者新居氏であるから、譯文の完璧なることは言ふ迄もあるまい」と紹介されている。

昭和14年（1939年）12月15日付けの『日本讀書新聞』ではHという署名のもと、『怒りの葡萄』の紹介記事が掲載されている。この中で、「本書によつて我々はアメリカの一つの眞實に觸れたやうな氣がする。概念的にアメリカを知る時代は過ぎた。今は悉くを具體的、生活實象的に知らなければならぬ。これまで政治的觀察に偏つてゐたかも知れない我々のアメリカ觀が本書の如きによつて社会的觀念を加へるならば、『怒りの葡萄』をわが國に移植する新らたなる意義に、評者は微笑を覺える」と評者のHは述べている。

昭和15年（1940年）1月10日付けの『日本學藝新聞』は、「飢えた絶望のかれらは、自分らの憧れたキヤリフォルニアが彼らを憎悪してゐることを知らされるといふ筋だ。かういふ筋は、あながち米國ばかりではない、東洋にもこれに彷彿した光景が現出されてはゐないか」と『怒りの葡萄』のすぐれた文学作品に見られる普遍性に着目している。またスタインベックの文筆力と格の翻訳については以下のように述べている。

この作者の描寫力の逞ましさ、正確さは定評がある。個々の人物の性格を精細な筆で分類し乍ら、統一した太い把握で引き締める才能をもつてゐる。農民性の粗野な面、淳朴な人間愛を野生の混りあつた性格の心にくいまでの把握。たゞこの譯文にもう少しの文章の修正が欲しいと思ふ。ともあれ、下巻の上梓を期待する。

スタインベックの描寫力は高く評価しているが、格の翻訳については注文をつけている。

次は、三省堂書店発行の『エコー』の新年号（昭和15（1940）年1月1日発行）の「讀書室」という欄からの抜粋である。

イヤリングでスタートした四元社といふ出版社から、怒れる葡萄が出た、これはアメリカの農民小説としてベストセラアになつたものの翻譯で、新居格が譯してゐる。新居格は大地以降翻譯のペンを捨てようと考えてゐたのに、はからずもこの書を讀んで、どうしても譯さずにはゐられなくなつたと告白してゐる。たしかにこの書は、熱情的な、そして克明な描寫によつて描かれたオオクラホマの農民たちの生活記録であり、同時に土と人間と、機械文明と金との微妙にしておそろしき關係を、つぶさに物語つて而も詩情をおりこんでゐるロマンスである。いろいろなタイトル文學が日本でも今日盛んになつて來てゐるが、中でも農民小説が今年度は相當問題になつてゐた。そして、その後一つの大作も出て來ない状

態にある時、この書をよむことはたしかに一つの示唆をわれわれにあたへるのも(ママ)である。

格が翻訳のペンを捨てようと考えていた時に、『怒りの葡萄』と出会って感銘を受け、翻訳出版したこと、先ほど話題とした農民文学についてなど述べられている。

また旧満洲国に対して日本が多大な影響を持っていたこのころ、『満洲日日新聞』（第一萬二千百三十二號）（日曜日）において、角畑将二郎が「ジョン・スタインベック著 新居格譯『怒りの葡萄』（上巻）」にて『怒りの葡萄』を紹介している。その中で「兎に角今年の読書界の傑作の部に入らう。読んでみて満洲にも、この位の文學否これ以上の文學が充分生れ得る可能性があると思はれた」と述べられている。

そして、東京農業大学が発行していた『農大新聞』昭和14年（1939年）12月10日付けには、矢澤浩による『怒りの葡萄』の書評が掲載されている。この中では、いかにも農業大学らしい視点から以下のように評している。

この小説を読んで始めて、アメリカと云ふ國の如何にもゆつたりとした大國と云ふ感じを如實に受けるのである。アメリカの大農經濟はその自然的条件によつて招來されたものであるが、かゝる農業における小作經營でも必然的に資本家的企業にまで發展しなければならない。この小説では、未だ前世紀的な小作經營が資本家的企業によつて打ち負かされる過渡時代を取り扱つたわけである。かゝる轉換期が、アメリカにおいては砂塵の猛襲と云ふ如何にも大陸的な自然的災害を契機として訪れたのである。

そして、最後に「兎に角、アメリカの農業と農民を知るための小説として極めて氣のきいたものと云うことが出来る」と書評を締めくくっている。

4. 終わりに

以上、ジョン・スタインベックの*The Grapes of Wrath*を『怒りの葡萄』として初めて日本語に翻訳した新居格について、その人生と仕事について大まかにたどり、その中から特に翻訳者としての側面について検討した。また、『怒りの葡萄』翻訳時期の日記や出版後の『怒りの葡萄』についての紹介記事などの貴重な資料を見せていただく機会を得て、それらを紹介しつつ、新居格の『怒りの葡萄』翻訳の意義等について考察をおこなった。今後、機会を改めて、新居の『怒りの葡萄』の翻訳文の詳細な検討もおこないたいと考えているが、本文中にも述べたように環境に恵まれた後世の者が、先駆者の翻訳の良し悪しを検討することは単なるあら捜しと言えるかもしれない。むしろ大切なことは、米国で原書が出版された直後、また日米開戦の直

前という時期にも関わらず即座に翻訳が出版された事実であろう。この時期に同作品の翻訳出版がされていなければ、戦時中および戦後の我が国の状況を考えると翻訳出版はかなり後になっていたであろうと考えられる。このことについて証明をするのは難しいことではあるが、現在、日本においてスタインベック文学の人気の根強いことの理由の一つに原書出版直後の『怒りの葡萄』の翻訳出版という事実があると考えてもよいであろう。これまで、1939～40年の『怒りの葡萄』初訳当時の資料を見ることは必ずしも簡単なことではなかったが、翻訳者である新居格側からのアプローチにより貴重な資料群を閲覧することができた。

なお、大正から昭和の時代にかけて様々な面で活躍した新居格であるが、貴重な資料の多くは子孫の方々の努力により散逸は免れている。後世の文学研究者、思想研究者、翻訳研究者及び翻訳家、政治研究者及び政治家など多くの人が閲覧できるような形で資料を保管する体制が整うことを強く希求する。また筆者も微力ながらそれに対して協力を行いたい所存であることも申し添えたい。

謝辞

本研究を行うにあたって、新見公立短期大学元学長であり新居格の甥である新居志郎氏には学長在任中から様々な形で新居格について教えていただいた。また、新居志郎氏の紹介により、新居格の資料等を保管されている東京都在住で新居格の孫である元田進氏より新居格の日記、および雑誌や新聞等に執筆した記事等を閲覧させていただく機会をいただいた。ここに両氏に対して深く感謝申し上げたい。

註

- 1) この弁論大会については、新居志郎著「新居格の徳中時代の処女演説」に詳しく書かれている。
- 2) この「●五章」の部分は判読が難しいが、1939年に『怒りの葡萄』上巻で17章までを翻訳出版しており、これが1940年1月31日付の日記での記述であることと、『怒りの葡萄』は全30章であることから、「●」の部分は「弐」または「貳」の崩し字であると考えた。
- 3) 日記の本文または欄外に読んだ本について書いていることもあった。読んだ本の書名を全て日記に書いたとは考えられないが、日記文を精査することによって新居格の読書リストを作ることが可能である。

文献

H 「怒りの葡萄」スタインベック著 新居格譯『日本

- 『讀書新聞』(1939(昭和14)年12月15日)
 大江專一「讀書界 アメリカ 最近の傾向」『日本學藝新聞』
 (1939(昭和14)年10月5日)
 角畑将二郎『滿洲日日新聞』(第一萬二千百三十二號)(日
 曜日)
 久保田 文・山内 圭「第43回全国大会報告 新居志郎先生に
 よる基調講演「斷想・新居格と『怒りの葡萄』」『The John
 Steinbeck Society of Japan Newsletter』No.65 (Sep. 30,
 2019) 1-3.
 三省堂書店「讀書室」『エコー』新年号(1940(昭和15)年
 1月1日、三省堂
 新聞之新聞「新刊案内 怒りの葡萄」『新聞之新聞』(1939
 (昭和14)年11月15日)
 中央産業組合新聞「怒りの蘭菊」『中央産業組合新聞』年
 月日不明
 中外商業新報「◇怒りの葡萄」『中外商業新報』(1939(昭
 和14)年11月27日)
 徳島県立文学書道館『徳島県立文学書道館 文学特別展 モ
 ボ・モガの生みの親 新居格の仕事』(特別展図録)2021.
 中山喜代市『人と思想 188 ジョン・スタインベック』東
 京：清水書院, 2009.
 新居格「土の文學 スタインベックの「怒りの葡萄」」発表
 媒体不明, 1946年6月か
 --『杉並区長日記 地方自治の先駆者 新居格』静岡県富士宮
 市：紅霓社, 2017.
 新居志郎「伯父・新居 格」『日本ジョン・スタインベック
 協会 Newsletter』No.26 (November 30, 1998) 5.
 --「新居格の徳中時代の処女演説」『旧徳中 城南高 同窓
 会々報』第95号, 2021.7.10, 5-6.
- 日本學藝新聞「『怒りの葡萄』上巻 スタインベック著 新居
 格譯」『日本學藝新聞』1940(昭和15年1月10日)
 日本農業新聞「新刊紹介「怒りの葡萄」」(1939(昭和14)
 年11月20日)
 パピーニ, ジョヴァンニ『パピーニ自叙伝=終りし人=』新
 居 格訳. アテネ書院, 1924. (国立国会図書館デジタルコ
 レクションで閲覧可) [https://dl.ndl.go.jp/info:ndl
 jp/pid/983321](https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/983321) (2022年9月19日閲覧)
 矢澤浩「書評「怒りの葡萄」」『農大新聞』東京農業大学(1939
 (昭和14)年12月10日)
 山内 圭「【特別寄稿】徳島県立文学書道館文学特別展「新
 居 格の仕事」展覧記」『日本ジョン・スタインベック
 協会 Newsletter』No.68, 2021, 4-7.
 和巻耿介『評伝 新居 格』東京：文治堂書店, 1991.
 Rawlings, Marjorie Kinnan. *The Yearling*. 1938. New
 York: Scribner's, 1970. (『イアリング』新居格訳. 東京：
 四元社, 1939.)
 Steinbeck, John. *The Grapes of Wrath*. New York:
 Viking, 1939. (『怒りの葡萄』上巻・下巻 新居格訳. 東
 京：四元社 (のち第一書房), 1939/1940.)
 --*Working Days: The Journal of The Grapes of Wrath*.
 Ed by Robert DeMott. New York: Penguin, 1989.
 --*Journal of a Novel: The East of Eden Letters*. 1969,
 London: Penguin, 1990.

Itaru Nii, the First Translator of John Steinbeck's *The Grapes of Wrath* into Japanese

Kiyoshi YAMAUCHI

Summary

This paper explores Itaru Nii as the first translator of John Steinbeck's *The Grapes of Wrath* (1939) into Japanese. The author of this paper had an opportunity to use Itaru Nii's diaries and essays which are kept by Itaru Nii's grandson, Susumu Motoda.

Keywords: Itaru Nii, *The Grapes of Wrath*, John Steinbeck